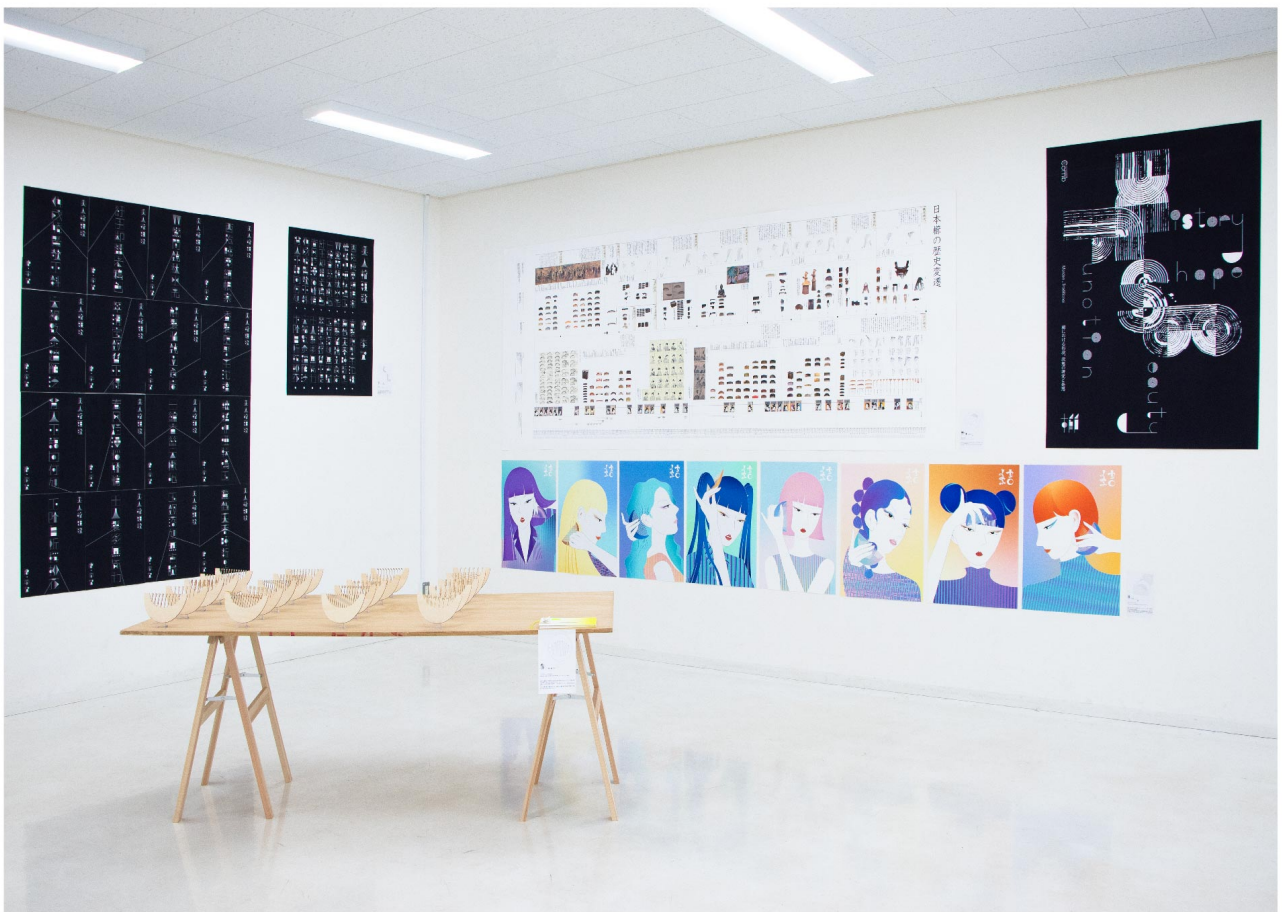


趙 氷茹 ZHAO Bingru



櫛における形状、状態の研究と発想
アクリル、紙、木材

櫛における形状、状態の研究と発想

伝統的なものは、現代文明の発展とともに存在感が薄くなった。都市化しグローバル化が進んだ結果、文化遺伝子と人々のアイデンティティがだんだん失われていく。物質的生活の近代化とともに文化的、精神的喪失感をますます感じさせる。

日本の伝統的な物には、その時代の人々の文化的遺伝子が含まれている。そして、この中に日本的なアイデンティティを見出すことができる。これは、私たち外国人の目から見れば極めて魅力的なことである。そこで、新たな視点からアプローチし、デザインし、伝統的な工芸品をヴィジュアルデザイン的方式で再表現する。

いつもショートヘアの私にとって、日常生活で欠かせないものの一つとして、櫛をあげることができる。毎朝、掻き乱された髪形をしていて、それは櫛でむしゃくしゃして髪を整えるしかできなかった。櫛は私の必需品になった。髪の下肌は敏感で、櫛の歯が頭皮を触るたびに、鋭い刺激を与えることは、ほとんどセクシュアルな快感といえるように思うのだ。櫛が人と深い繋がりがあると考え、このきっかけで櫛に興味を

持ち始めた。

本研究では、櫛の形状と状態とそれから派生したHistory(歴史)、Shape(形)、Function(機能)、Beauty(美)四つ主題へ繋ぎ、現代人の視点から櫛の研究から発想へ、平面から立体へ考えていく。

伝統と現代の繋がりは、0からではなく1から始まるべきだと思っていた。全く新たなものを作るというわけではなく、昔の櫛の中から現代生活とのつながるところを探る。ですから、作品の発想部分を始まる前に、たくさんの本を読みながら櫛の知識の不足を補おうとした。さらに、利用できるものを一枚の年表でまとめた。この年表を通して、私たちが今まで見たことのない櫛の過去を理解すると考えた。発想の部分には、形状と状態の個々の部分を発想して、さらに櫛の形状、状態両方でも反応できる文字へと繋がっていく。

シリーズ作品を通して、櫛に新たな生命を与え、背後に含まれているもの、膨大な文化的知恵を掘り起こし、櫛の面白さを人々に伝えながら、櫛に対する新旧の対話(感情)を喚起したいと考えた。